

## ◎買う

中部ベトナムにあるホイアンは、古い街並みや家屋が残っている街です。日本で言えば、「京都のような所」と言えば、わかりやすいでしょうか。この時期にこの街で、「満月の夜」に行われる「ランタン祭り」は、前回に書いた「ハロン湾のクルージング」と並ぶ今回の旅のメインメニューでした。街のいたる所にランタン(角灯)が灯され、とても綺麗でロマンティック、ということでしたが…

ランタン祭りの当日、6月8日の夜は、又しても雨。それも相当に激しい降り方で、なかなか止まないのです。強い雨のため、夕食をとったレストランの中から出ることもできない状況になりました。

「この雨じゃあ、今夜のランタン祭りは中止かねえ」

「せっかくここまで来たのにねえ」

そんな雰囲気になりましたね。とりあえずツアー全員の傘を、現地ガイド氏がバスまで取りに行行って待機していると、少し雨足が弱くなってきたのです。

「これなら、ありそうだね。行って見ようよ」



まずは全員に、現地ガイドの「ベトナムの堺雅人」クンが、携帯番号のメモを渡して注意します。

「この灯りのついた棒を私が持ってますから、これを目印に付いてきてください。もし万一迷ったら、誰かに携帯に連絡してもらってくださいね」

ランタン祭りの中心部はもの凄い人出。満月で明るいはずが、小雨が降っているため「新月」状態で真っ暗の夜、人ごみをかき分け、通りを歩きました。こんな状況で31名が一緒に動くのは大変です。「迷子」になって他の人に迷惑をかけないように、必死で付いて行きましたよ。とてもじゃないが、「幻想的な光の祭典」を楽しむ余裕も情緒もなかったですね。一通り見終って、はずれの川の側の公園でやっと15分の休憩タイム。

ヤレヤレと思っていると、ウチのカミサンが一言。

「ワタシ、ちょっとランタン買ってくるね」

「オイオイ、そんな時間ないで！」

もう歩き出して、人の群れに向かっていくカミサンに、あわてて付いて行きます。通りを横切ると、屋台の店が沢山あり、意外に早くランタンを見つけました。カミサンは「コレとコレがイイよね。アレも欲しいね」と、いい調子で選んでいるのですが、ここで思わぬ「言葉のカベ」。日本語はモチロン、英語も通じないので、「値段交渉」が出来ないのです。さらにワルイことに、夜店や路上販売の場合はベトナム通貨の「ドン」しか使えないのです。旅行者の多い「みやげ店」はドルが使えますし、時には円でもOKなんですけどね。



＜困ったアー！どうしたらエエんかいのう＞

と思ったら、店のオバサンが**電卓**を取り出し、値段を打ちましたね。ここから交渉が始まりました。「ナルホド！6万ドンね。三つ買うから、もうチョット安うならん？」

そこでオバサンがブツブツ言って、値段を打ち直します。

こんな感じで、無事に二件の屋台で、計6個のランタンを買うことが出来ました。使ったお金は、全部で30万ドン！オドロクことはないのです。1万ドンが約50円ですから、全部で1500円位です。大小あって一個が平均250円程度ですから、これを作る手間を考えれば、絶対に**安い**です。何のためにランタンを買ったかって？カミサンのことですから、雛飾りに使うに決まっているんですよ。



次の日は朝から、今度は「三輪タクシー」にて、ホイヤンの同じ場所に。自転車の前に車椅子状のものが付いており、そこに観光客が乗って、後ろで自転車をこいで移動するわけです。車輪の数は四つになりますから、正しくは「四輪自転車」というべきでしょうな。これは快適なドライブでした。天気も回復し、ベトナムの古い街の路地をゆっくりと見ましたね。昨夜の「悲惨なランタン祭り」の埋め合わせが出来たという感じでした。間もなく「自転車タクシー」は、中心部の来遠橋(らいおんばし)近くに到着。ここは、1593年に日本人が建造したと言われる観光スポット。そこに行くと、あちこちに沢山の「路上土産販売」の**アンヤン**(若いニイサンのことすな)と、天秤棒をかついだオバサンたちが立っています。言い換えれば、店舗なく、移動自由な、無許可の「みやげ売り」の人たちですね。



昨夜、ランタンを買って「買い物スイッチ」がオンとなったウチのカミサン。まず始めに興味を示したのは、「火の鳥」という名のオモチャでしたな。日本の小さな凧(たこ)に、竹とゴム紐を取り付けたという感じの簡単なもの。これが、輪ゴムをクルクルと巻いて上に放すと、パタパタッとオモロイ飛び方をするのです。

「ウチのハルクンの土産にしたら、喜びそうなねえ」

カミサンは4歳の孫の顔が浮かんだようすな。

すると、同じ思いのツアーのオバサンが、たちまち

3-4人集まって、いっしょに値段交渉が始まりました。

「タクサン買うんだから、アンタ負けなさいよ」というわけすな。

結局は、3個で5ドルを4ドルにさせることに成功したようです。

それにしても、4人のオバサンに囲まれたアンヤンは、怯えたような表情をしていましたな。きっと怖かったのでしょうね。



オバサンたちは交渉の成果があったようですが、私はこの時に愚かな失敗をしました。アンヤンの**カモ**にされて、欲しくもない「ハンモック」を買ったのです。木の間に吊るして寝る、ネットを編んだものですね。それを高い値段で買ってしまいました。その経過はこんな感じでした。



沢山の色とりどりの、ハンモックを肩に担いだアンヤン(右端の男ですな)が寄ってきて、私に話しかけます。

「コレ安くしとくで、コウテーな」「ナンボにするんや？」

「8ドルでエエわ」「高いワイ」「二つで10ドルにしとくわ」

「二つはイラン！一つ5ドルならコウたるわい」

といった感じの、ワケノワカラナイ会話(?)が、ベトナム語と日本語で交わされまして、一つ5ドルで買うことで交渉が一応成立しました。

そのあとで、アンヤンが、「**ドン**で払ってよ」と言い出したのです。その時に言ったのが

「30万ドン」(1500円)。それを言われるままに支払ってしまった、というお粗末な顛末なのです。



彼が言っていた一個5ドルは550円位ですから、3倍払ったことになります。つまりは、ドン単位が日本円と違い過ぎて、ピンとわからない上に、間にドルが入っていたので、混乱したのですね。アンヤンの「サギ戦術」にマンマとハマられ、ウマく値切ったつもりが、逆にカモにされたというわけです。少し後で考えて気が付きましたが、その時はアンヤンは目の前にいるはずありませんよ。ランタンの時と同様、海外での旅行の買い物には、電卓が必需品であることを、この時にも実感しましたね。

「買い物スイッチ」の入ったカミサンの次のターゲットは、**切り絵**でした。ベトナムの風景や動物などを、紙を切ってカードに立体化しているものです。ベトナム人は器用で勤勉な国民性らしいですので、絹の工房などに行くと、すばらしい刺繍画を売っていました。しかし、彼女の興味の対象は、そういう「高級品」ではなく、路上販売している「大衆工芸品」のようです。200年前の貿易商人の家だという「フーンフンの家」の入り口の前の路上にも切り絵が並び、カタコト日本語のアンヤンが立っています。

カミサンが立ち止って、並べてある切り絵へ熱い視線。すかさず、アンヤンが寄ってきます。

カミサン「欲しいのがイッパイあるわね」(と言いつつ選び始める)「これいくらなの？」

アンヤン(うれしそうに)「一つ5ドルでいいよ」

カミサン(選んだのを並べながら)「5つ買うといくらにしてくれる？」

アンヤン「全部で20ドルにしとくわ」

カミサン(少し考える素振り)「ウーン～やっぱりケッコウ高くつくナア。今回はやめとくわ！」

と言いつつサッサと歩きだす。

アンヤン(慌てて追いかけて来て)「15ドル！全部で15ドルにしとくよ！」



本気で買うと見せて、サッと引く……ウマイモンですな。一個300円程度のモノですが、この時の切り絵は、後で買ったものよりも、精巧で品質が良かったようです。カミサンが買っていると、一緒のツアーのオバサンたちも、集まってきてワイワイと品定め。三人位が買ったようです。女性は、他の人が買うと自分も欲しくなるようですね。あとでカミサンに言いました。

「オマエ、値切るのがウマくなったのう！」

「あの時のこと？アレはホントに急に買う気がなくなっただけなんじゃけど、ウマくいったよねえ」

## ◎食べる

バスから外を眺めると、いろんな生活風景も見えてきます。果物などの路上販売や、天秤棒をかついだオバチャンが色んな物を売っていますね。なかには路上で子豚の丸焼きなんぞも売ってま

すし、鏡と椅子を並べた「青空理髪店」もありましたね。雨が降ってきたらどうするのでしょうか。夕刻近くなると、家の前にテーブルを出して、皆さん食事を楽しんでいるようです。知人の家や近くのレストランなどにバイクで乗り付けて、軒先などにテーブルを出して、一杯飲みながら皆でワイワイと食事を楽しんでいるようすな。この国には、老人が一人ぼっちで食事をしている「孤食の風景」はないのかな、と思いました。こういう風景は中国でも見かけましたが、なんか人生を楽しんでいる感じでいいですよ。そう言えば、日本だって、ほんの少し前までは、今ほど飲酒運転を厳しく言わない時代もあったんですがね。



朝食なども、日本のように家で作って食べるという習慣はないそうで、みんな外で食べるらしいですよ。きっと家で作ったりするよりも、安くて美味しいのでしょう。**外食**の文化が根付いているんですね。路上のいたる所に、屋台やスタンドのようなものがあって、テーブルに座ったり、その場にしゃがみ込んで食べているんですが、これがなんか美味そうなんです。ちょっと行って、味見などしてみたい感じなのですが、ツアー旅行ではこれが出来ないんですよ。

以前にこの欄で書いた「コラム32 酒場放浪記」(’14・5)でも書いていますが、私は開高健著「白いページ」を読んでから、本当に美味しいモノは「路地の入口あたりで、湯気をたてている屋台」にあると、確信をもつようになったのです。簡単に言えば「貧乏人ほど、美味しいモンを食ってまっせ」という論理ですね。そのように考えたら、今回の旅の食事は、ツアーで設定されたホテルや、レストランばかりですから、ベトナムの美味しいモノについて語ることはできないですね。



ベトナム料理の代表といえば、フォー(Pho)という米粉で作った白い麺のスープですね。日本風に言えば「そうめん汁」という感じですが、これは何処で食べても必ず出ました。そして、それが具材も味も違うんですよ。生春巻き(Goi Cuon)やベトナム風お好み焼き(バインセオ)もよく出ましたが、概して薄味で淡白な味付けです。私には丁度いい味加減でしたが、物足りない場合は卓上に置いてある調味料で自分でやって下さい、ということらしいですな。

フルーツはさすがに豊富ですね。スイカやバナナやマンゴ、パパイヤなどは当然として、スターフルーツという、輪切りにすると星が出てくる果物もよく出てきます。南国だけに日本では見かけないような種類もありますね。ここでは**ランブータン**という果物を紹介してみましようか。これは果物というよりも、フラワーアレンジに使ったらオモシロイというような形と色をしています。ベトナムでは普通に、天秤棒を担いだオバサンが売っています。奇妙な形状に気をすることなく、「勇気」をもって、フォークで殻を剥いてみると、以外に柔らかい透明な実が出てきますね。これを口に含むと、プリンとした果肉の感触。これはレイシの味そのものです。「スゴク美味しい」とかいうのではありませんが、さわやかな「南国の香り」の果物ですね。





実質5日間のベトナム滞在でしたが、帰国してからフツと気づいたことがあります。ベトナム人の体型のことです。皆さんホンマにスリムなのです。特に若い女性に限れば、判で押したかのごとく、皆さん小柄で、小顔で、ホッソリとして、スマートなんです。中年女性にはやや太めという人も見かけますが、若い人で太っている人は全く見ませんでしたね。民族的な体質というはあるでしょうが、やはり食生活の影響は大きいと思います。減量してカッコよくなりたい人は、ヘタなダイエットプランにお金を使うより、ベトナムで半年位暮らした方がいいかもしれません。

## ◎泊まる

「アッ！**バラの花**！」

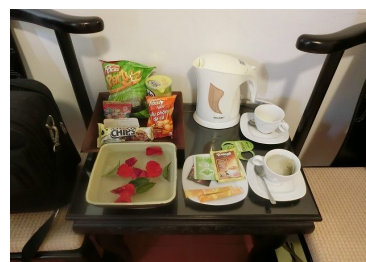
思わず声を上げましたよ。「雨のランタン祭り」の夜に、クタビレ果ててホテルに帰り、ともかくは風呂に入ろうと、バスタブにお湯を入れ、棚の上のタオルを取った、その時です！真っ赤なバラの花びらが2-3輪落ちてきて、湯船の上に浮かんだのです。

<スゴイ演出じゃわ！>

慌ててバスルームから出て、カミサンに報告。見ると、ベッドの上と、テーブルにもバラの花びらが。

「オイ！このホテル、もしかしたらスゴイところじゃないか！」

「明日の朝食が楽しみじゃねえ！」



この前に、もう一つ何かいいことの「予感」と、イヤな印象の両方がありました。ホテルに到着し、荷物をバスから下ろして、ロビーに入ると、そこは意外なほどに小さなホテル。その時、私たちの前に出されたのが**スイカ**の生ジュースでした。「ウェルカム ドリンク」というんだそうです。あえて訳せば、「お客様歓迎のためのお飲物」とでも言うんでしょうか。疲れ切った私達には、何よりの「ごちそう」でした。しかし、それから部屋のキイを受け取ると3階。それなのにエレベーターがなく、ラセン階段でどうぞ、荷物はベルボーイが届けます、とのこと。チョッと失望したですよ。その後に起こったのが「バラの花」というわけです。

ベトナム時間の6時過ぎ。早めの朝食をとるべく部屋を出て、離れの庭園の中にあるレストランに向かいます。昨夜は暗かったことと、疲れもあって全く気づかなかったのですが、このホテルは小さいけれどなかなかオシャレな造りです。ラセン階段なども、建物の外観も、フランス統治時代の雰囲気漂っています。朝食レストランに行く道すがら、あちこちに庭の手入れをしている人の姿が見かけます。大きな陶器鉢にスイレンが咲いていたり、実に行き届いた手入れがされているのがわかります。朝食レストランは、広々とした屋根付きのウッドデッキになっており、前にはハスの池が広がっています。



食事はバイキング式ですが、卵焼きとフォーは、注文すればその場で一人前ずつ作ってくれます。料理や果物、その他の飲み物も品数多く、いい感じです。まだ時間が早く、ほとんどお客のいない状態で、私たちはハスの池の近くのテーブルに座りました。

「やっぱり、ここの食事エエじゃないか！」

「この庭の雰囲気も、サイコウじゃねえ！」



食事をしていると、どこからともなく不思議な**旋律**が流れてきます。楽器とは違う音質で、やさしい金属音とでもいうんでしょうか。高い音域なのに、不思議と耳のジャマにならない、心が落ち着いてくる音なんですよ。



食事を終えてから、池の側に行ってみると、すぐに音源がわかりました。10 m 位のかかなり大きな木製の楽器、というより「発声装置」とでもいうべきなんでしょうかね。原理的には日本の庭に使われている、「水琴窟」(すいきんくつ)と同じものだと思います。こちらは沢山の長さの違う竹を組んで、その中に水音を共鳴させて、いろんな音を出しているのではないかと「シロウト判断」しましたね。

「Cooans Tack」(クーンズ タック)とネームが付いていました。

この楽器の側のハス池の中に一輪の**ハスの花**を見つけました。多分咲いたばかりなのでしょう。ウチのカミサンは感動していましたよ。「こんなに綺麗に咲いたハスって、初めて見た！」



翌朝の5時過ぎ、早起き癖の私は、カーテンを開けてベランダへ。南国の太陽が昇ってきます。ここは街の中心ではなく普通の住宅街のようです。周りの家は民家ばかりです。3階の部屋の前に大きな椰子の木が伸びており、その幹に何やら見たことのある大きな葉が絡み付いています。大きなハート型の緑に黄色の斑。<**ボトス**じゃないか！>葉の長さは推定1 m 位。日本の園芸店にあるものに比べて、巨大過ぎてわか

りませんでした。十分な温度と雨があれば、こんなにも大きくなるものだったのですね。

この時、遠くの空からニワトリの鳴き声。

< **コケコッコォ〜〜〜** >

こんなにも大きな声で鳴くんですね。鳴き終ると少し余韻が入り、その後すぐに連呼。ベトナムのニワトリって元気がいいです。日本で鳴いたら近所から苦情がきて、即、殺処分かもしれませんな。

ホイヤンの宿泊ホテル「フーティン ブティック リゾート&スパ」

10年位前のことですが、農園視察で東南アジアに行った折に、埼玉の生産者の人と話す機会がありました。その人はベトナムが大好きで、年に何度も行くというのです。「何がそんなにイイんですか？」と聞きました。「モノが安いし、食事もおイシイですよ。それに人間もイイですね」という答えでしたね。その時はピンとこなかったのですが、今はイメージがわきますし、理解できます。その人は多分こんなホテルに泊まったのではないかと、思いました。10年前のベトナムというのは、今よりもっと素朴で観光化されていないでしょうし、今より良かったかもしれません。しかし、今から10年後となると……わかりませんよねえ。

一日の観光が終わってバスで帰る時に、必ず二か所のホテルに停まるのです。そう言えば、このツアーには、宿泊ホテルがデラックスのコースと、スタンダードのコースとがあつたのですよ。私達は「ホテルなんて普通でいいよね」として安い方にしていました。

ホイヤンのホテルで朝食を食べつつ、カミサンが言いました。

「安いコースにしといて、ホンマにヨカッタねえ。そうせんと、このホテルに泊まれなかったもんね」